

Title	III Mantleの構造(<特集>地球と物性研究)
Author(s)	秋本, 俊一
Citation	物性研究 (1964), 1(6): 448-456
Issue Date	1964-03-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/85573">http://hdl.handle.net/2433/85573</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

### III Mantle の構造

秋本俊一(物性研)

#### § 1. はじめに

地震波の測定から、地球は

crust : A  
mantle: B, C, D  
core : E, F, G

の層構造をなしていることが知られている(IV参照)。mantleはB, C, D三層に分けられる。B, D層における密度その他の量のゆるやかな変化は、均一な物質のadiabatic compressionとしてほぼ説明がつくが、C層(深さ約300km~1000km)における急な変化はこれでは説明できない。conductivityはここで $10^3$ 倍変化する。(図3-3)。

Mantleを構成する物質はsilicateと考えられる。これは、

(1) マグマが火山から熔岩として噴出する際、深部の岩石をとりこんでくるので、火山岩を調べることによりmantle上部の様子がわかるが、これはsilicateを主体としている。

(2) 地球はstony meteorite(隕石)が集つてできたと考えられるが、隕石はsilicateでできている。

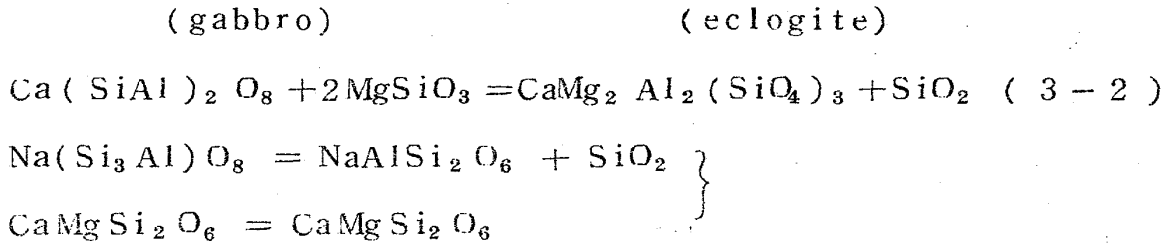
等のことから推定している。crustに孔をあけて直接mantleの物質をとり出そうという“Mohole計画”も進行中である。

最近の高圧実験の進歩により、staticな方法で約10万気圧の発生が可能となつた。これは地球内部にして深さ400km, C層の上部に相当する。そしてsilicate mineralの高温・高圧下の相転移の研究によつて、C層におけるdensity, conductivityなどの急な変化がsilicateの相転移と



(b) eclogite  $\leftrightarrow$  gabbro

これを support する高圧実験がある。



この反応は 600 °K, 18000 気圧 (ほぼ boundary に相当する圧力) でおこる。

しかし, このような phase boundary だとすると, 等しい深さのところに discontinuity がなければならず, 大陸下と海洋下の深さの差は説明できない。それで, M-discontinuity は chemical boundary だとするのがもつとも自然であろう。

現在 crust, mantle 上部の構造は図 3-1 のように考えられている。mantle を構成する主要鉱物は Mg, Fe の olivine ( $\text{M}_2\text{SiO}_4$ ), pyroxene ( $\text{MSiO}_3$ ) である。

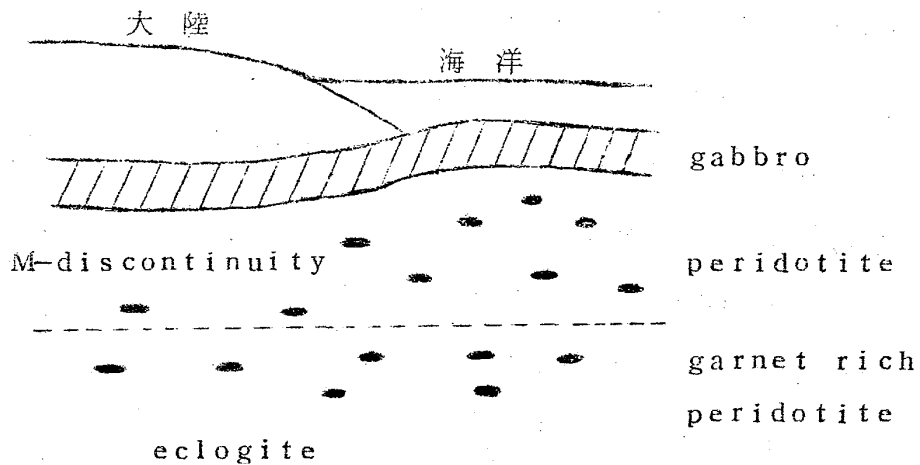


図 3-1. crust, mantle 上部の構造

### § 3. Silicate, $\text{SiO}_2$ の相転移

#### (1) olivine $\rightarrow$ spinel

この転移は1930年代から予想されており、5～6年前から実験的にも確められた。一番重要な $Mg_2SiO_4$  についての実験はまだないが、 $Si \rightarrow Ge$ ,  $Mg \rightarrow Fe$ ,  $Ni$  etc.のおきかえをしたものについての実験から、 $Mg_2SiO_4$  についてもこの転移があることはほとんど間違いない。

$Mg_2GeO_4 - Mg_2SiO_4$  系の相図を図3-2に示す。<sup>1)</sup> これから100%  $Mg_2SiO_4$  まで ex-

trapolateして、

$Mg_2SiO_4$  は100kb

あたりで spinel に転

移することが予想され

る。その他、

$Ni_2GeO_4 - Mg_2SiO_4$

系<sup>2)</sup>  $Ni_2SiO_4$ <sup>3)</sup> など

の実験もある。現在ま

でに得られ、あるいは

予想されている転移は

表3-1のようになる。

実際に mantle を構成

している  $Mg_2SiO_4 -$

$Fe_2SiO_4$  系については

$Mg_2SiO_4$  (4%) +  $Fe_2SiO_4$

(96%) が1300℃、

70kbで spinel に転移した。<sup>4)</sup>

$Mg_2SiO_4$  の量を多くした

ものについての

実験はまだない。最近物性研

に設備された tetrahedral anvil

型超高压発生装置を用いて得られ

た  $Fe_2SiO_4$ ,  $Ni_2SiO_4$  につい

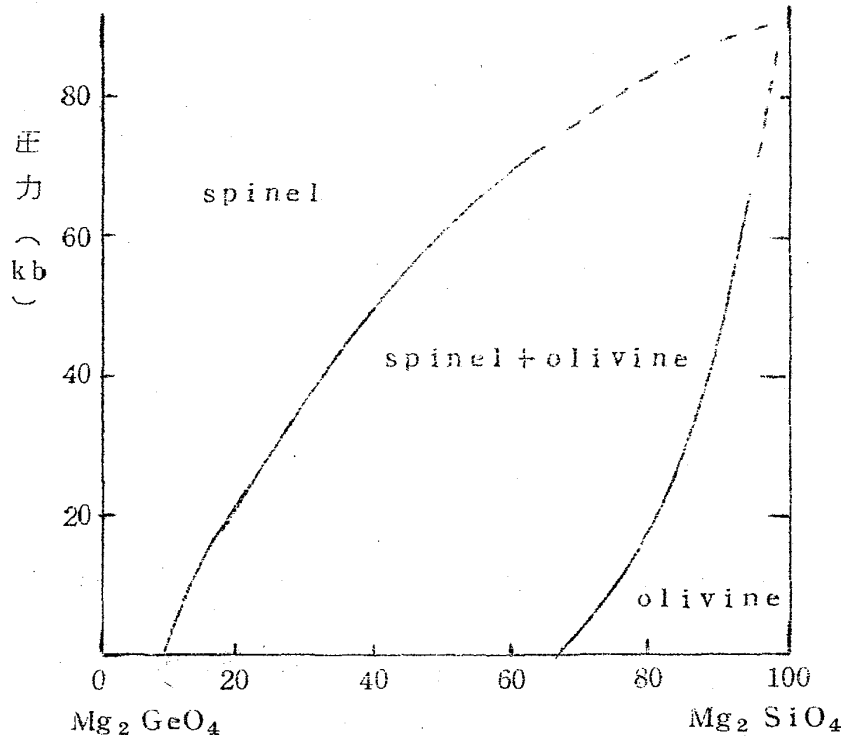


図3-2.  $Mg_2GeO_4 - Mg_2SiO_4$  系の相図 (542℃)

た  $Fe_2SiO_4$ ,  $Ni_2SiO_4$  についての olivine-spinel 転移に対する相平衡図を図3-3に示す。

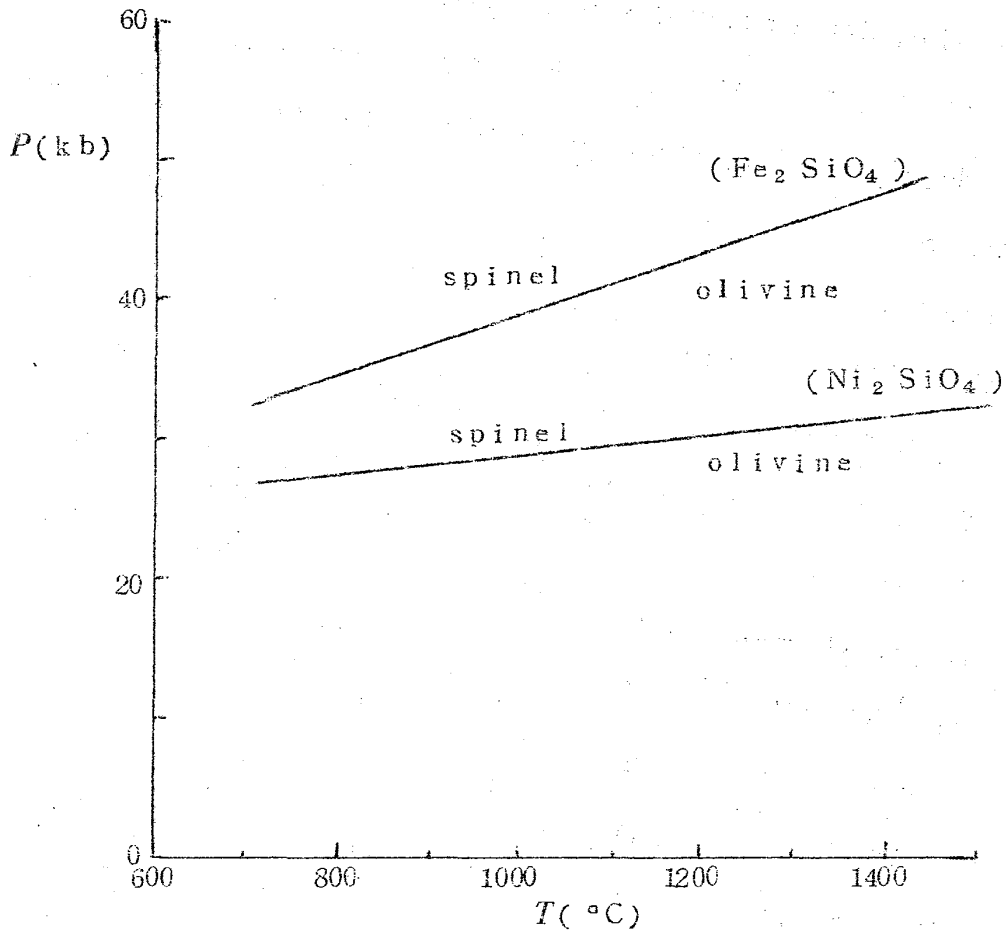


図 3-3.  $\text{Ni}_2\text{SiO}_4$ ,  $\text{Fe}_2\text{SiO}_4$  の olivine-spinel 転移に対する相図

表 3-1. olivine  $\rightarrow$  spinel 転移

component	温度	転移圧力	密度増加
$\text{Mg}_2\text{GeO}_4$	820 °C	0kb	8.5 %
$\text{Ni}_2\text{SiO}_4$	550	$18 \pm 5$	9
$\text{Fe}_2\text{SiO}_4$	600	38	10.5
$\text{Co}_2\text{SiO}_4$	700	$70 \pm 20$	9.8
$\text{Mg}_2\text{SiO}_4$	600	$130 \pm 20$	> 9
( 予想 )			

$\text{Fe}_2\text{SiO}_4$  について常温で resistance を測定したところ

olivine :  $10^6 \sim 10^7 \Omega\text{m}$

spinel :  $10^3 \sim 10^4 "$

と予想通り spinel の方が  $10^3$  倍だけ conductive である。

(2) pyroxene  $\rightarrow$  corundum<sup>5)</sup>

$\text{Si}^{4+}$ ,  $\text{Ge}^{4+}$  のイオン半径は  $R_{\text{Si}} = 0.42 \text{ \AA}$ ,  $R_{\text{Ge}} = 0.49 \text{ \AA}$  である。silicate, germanate の相転移が,  $R_{\text{Si}}/R_{\text{O}}$ ,  $R_{\text{Ge}}/R_{\text{O}}$  ( $R_{\text{O}}$ : O イオンの半径) が圧力によつて変化し, 一定の値を越えたときにおけるとすると,  $R_{\text{O}}$  の方が大きいだけに圧力の影響も受け易いだろうから,  $R_{\text{Si}} < R_{\text{Ge}}$  で germanate の方が低い圧力で転移することが予想される。olivine  $\rightarrow$  spinel でもそのような事情があつたが, pyroxene  $\rightarrow$  corundum でも germanate の方が実験が容易である。

種々の germanate の pyroxene について実験した結果, いくつかの型の相転移がみられた。

(a)  $\text{MgGeO}_3 \rightarrow \text{MgGeO}_3$

orthopyroxene ilmenite

28kb でおこり, 密度は 15% 増加する。同じ型の転移をするものに,

$\text{MnGeO}_3$  : 25kb      密度増加 18%

$\text{Mg}(\text{Ge}_{.97}\text{Si}_{.03})\text{O}_3$  :  $\sim 60\text{kb}$       "      14%

がある。この転移で Ge は 4 配位の位置から 6 配位の位置にかわつており, close packed に近い構造となるので密度の増加が大きい。

(b)  $2\text{FeGeO}_3 \rightarrow \text{Fe}_2\text{GeO}_4 + \text{GeO}_2$

clinopyroxene spinel rutile

10kb でおこり密度は 11% 増加する。同じ型の転移をするものに:

CoGeO <sub>3</sub> :	10kb	密度増加	11 %
(Mg <sub>0.75</sub> N <sub>0.25</sub> ) GeO <sub>3</sub> :	22kb	"	10 %
Mg (Ge <sub>0.90</sub> Si <sub>0.10</sub> ) O <sub>3</sub>			
~ Mg (Ge <sub>0.50</sub> Si <sub>0.50</sub> ) O <sub>3</sub> :	50kb	"	15 %

がある。

(c) その他。 garnet 型の構造に転移する例として CaGeO<sub>3</sub> がある。

### (3) SiO<sub>2</sub> の相転移<sup>6), 7)</sup>

quartz から 500~800 °C, 35kb で coesite にかわり, 1200 ~ 1400 °C, 120kb でさらに稠密な stishovite にかわる。 stishovite は rutile 構造 (Si は 6 配位) をもち, 密度は coesite に比べても 46 % も大きい。

## § 4. Mantle の構造

§ 3 で述べた高温高圧実験の結果から, mantle の主要構成鉱物は

B層: olivine, pyroxene, garnet

C層: 相転移がおこっている漸移層

D層: spinel, corundum, rutile

と考えられる。 C層での pyroxene の転移としては,

pyroxene → olivine + stishovite

→ spinel + coesite

→ spinel + stishovite

などが可能であるが, spinel よりも stishovite の方ができ易いことを考えると, まず第一の型の転移がおこるものと考えられる。

転移層が 400~1000km と広い巾をもつことは, 化学組成が単純であれば理解できない。しかし, 実際に mantle を構成する物質は複雑な化学組成を



もつてであろうから、このような広い巾もおかしくない。

D層のさらに深いところではどうなっているか？ おそらく、 $MgO, SiO_2$  のような oxide になつているであろう。Oが close packed structure をとり、その間に他の element が入り込んでいるような構造が想像される。

mantle の構造に対するこのような考えが正しければ、隕石中にも spinel, corundum が見出されそうであるが、まだ発見されていない。

### Discussions

△地磁気の測定から推定される場所では、mantle の conductivity  $\sigma$  は図3-4のようである。mantle の底が oxide とすると、 $\sigma$  は spinel より oxide が小さいと思われるが、その点は矛盾しないか？

△D層での  $\sigma$  の増加は温度の効果  $\log \sigma$

だけで説明できるか？

△mantle の底での conduction

は electronic か ionic か？

— わからない。

△D層で Fe が底にいくほど少量ずつふえていたとすると、conduction には大きな影響があるかも知れぬ。

△比較的新しい地震学における観測結果（表面波、及び核爆発）から

地球のマントル上層部はそれ程

一様でないという事が判つて来た。少なくとも深さ約100~200km位の所迄は地域的にかなりの差があると考えられている。又、人工衛星の軌道等から予想される地球の重力場の異常を説明するためにも、かなり深い所迄一様で

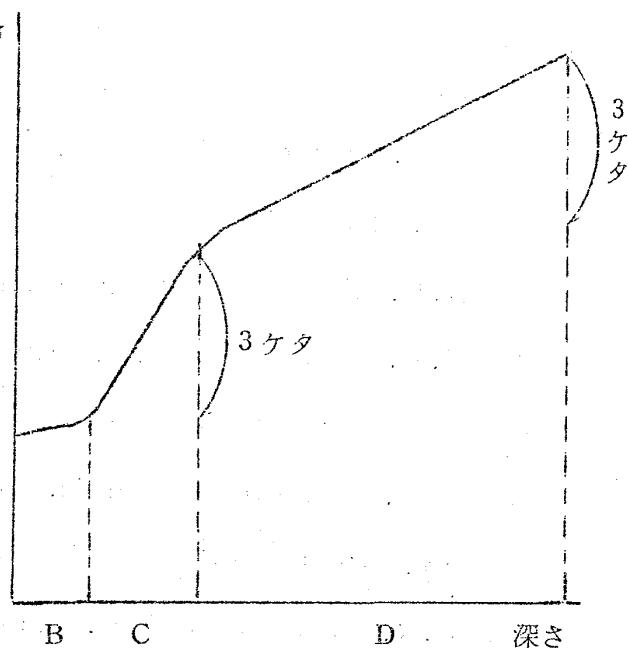


図3-4. Mantle 内の conductivity.

秋本俊一

ないと考えた方がよい。重力の場合には、深さを正確に推定することは出来ないが、100km の程度の深さであることは十分考えられる。(金森)

△mantle 上層に fluid に近い所があるとみられる。それは、最近の表面波の研究から推定される低速層の存在に基礎をおくものであるが、この低速層は深さ約 100km 位から約 200km 位の所迄の  $V_s$  が約 0.3km/sec 位遅いものである。従ってここでのポアソン比の増加は大きく見つもつても 0.05 程度である。従って、fluid といつても、普通の意味の fluid という訳ではない。(金森)

#### 文 献

- 1) F. Dacheille and R. Roy ; Amer. J. Sci., 258, 225(1960)
- 2) A.E. Ringwood and M. Seabrook ; Journ. Geophys. Res., 67, 1975(1962)
- 3) A.E. Ringwood ; Geochim. Cosmochim. Acta 26, 457(1962)
- 4) F.R. Boyd and J.L. England ; Carnegie Inst. Geophys. Lab. Year Book '60
- 5) A.E. Ringwood and M. Seabrook ; Journ. Geophys. Res., 68, 4601(1963)
- 6) F.R. Boyd and J.L. England ; Journ. Geophys. Res., 65, 749(1960)
- 7) S.M. Stishov and S.V. Popova ; Geokhimiya no.10, 837 (1961)